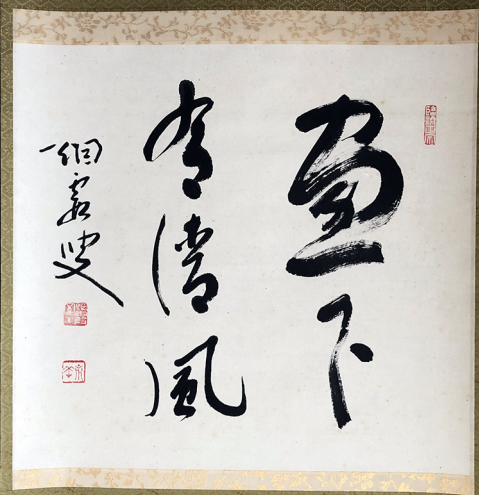




「窓下有清風」
そうかせいふうあり

前禅昌寺住職

烟霞室

磯部文保老大師

(大正七年〜平成十三年)

「消暑」
もつ はんしよ 白居易

何を以て煩暑を消さん
たんきょ いちいん うち

端居す一院の中
かんぜん ちようぶつ

眼前 長物無く

窓下 清風有り

熱の散ずるは心の静なるに由り
しん じよう

涼の生ずるは室の空なる為なり
しう くら ため

此の時 身 自ら得たる
こ じん おのずかえ

更に人と同じうし難し
さら ひと おな ごと じう し なた

實相寺 花園会報

令和元年

九月一日発行

発行所

臨済宗妙心寺派

陽明山 實相寺

實相寺花園会

〒761-0450

高松市三谷町

1811番地1

TEL087-889-3838

編集発行人

山本文匡

<http://www.jissouji.net>

第125号



「夏の境内一斉清掃」

8月4日(日) 午前7時半より恒例のお盆前の境内一斉清掃を実施したところ、花園会、坐禅会の会員さん併せて32名のご参加がありました。清掃後は、当日ご命日の秋月院殿塔と無縫塔に皆でお参



り致しました。ご参加頂いた皆さん、暑い中ご協力有難うございました。

【花園会】新居邦俊・悦子、高見政己、

高見潤一郎、中井一誠、中井智男、中

井愛雄、中井敏之、中井宏幸、中井雄

三、佐野浩二・美恵・ひなた、相良征

人、島田晃男、渋谷幸一、関博之、松

本幸一・真理子、山崎正晃、

山崎清、渡辺浩、渡邊民枝、

佐野和子、錦織ユリ子、近

石敬子

【坐禅会】戸澤祐二、北尾

登志郎、田中隆夫、岩見明

浩、藤目浩二、三木有人

順不同、敬称略

「随想随筆」② ― 照顧脚下 ―

先月に引き続き『中外日報』に掲載予定のコラムをご紹介します。

――
高校時代は自坊に戻った為、小僧時代には出来なかつた趣味の音楽活動に没頭しました。都会でバンドをやる為に大学にも進学しましたが、四年になる頃には音楽への情熱も消え失せ、卒業後は何となく促されるまま禅道場に入門しました。しかしそんな中途半端な気持ちでしたから、道場に入ってから「何の為にここにいるのか?」、「修行して一体何になる?」とその場から逃れることばかり考えていました。そして入門して半月ぐらいが過ぎたある日、ついに逃げ出したの

です。自坊に帰った私に母は「情けない、そんなつもりであなたを生んだ訳じゃない」と歎き、「じゃあ私はお寺を継ぐ為に生まれてきた道具なのか」と口論しましたが、この時に生じた「自分は一体何の為に生まれてきたのか?」という問いは、皮肉なことに一大事因縁といわれる禅の根源的問題でもありました。

結局、周囲には大変ご迷惑をお掛けしましたが、老大師のご配慮もあり翌日には道場に戻ることができ、その後三年ほどお世話になりました。しかし、自分の人生に対する使命感や覚悟というものが臆気ながらも見えてきたのは三十歳を過ぎてからでした。結婚式の二日後に阪神淡路大震災が発生したことが影響したか

もしれません。震災で多くの方々が亡くなる一方で、私達は新しい家庭を作り、その年のうちに長男を授かりました。

翌年、道場で同期だった友人に誘われて、「高等布教講習会」に参加しました。そこで出会ったお釈迦様の教え、講師の方々と共に学んだ法友に導かれて僧侶として生きる覚悟が定まっていった気がします。二度、三度と受講し、本山でのお手伝いもするうちに、少しずつ自分が為すべきことが見えてきました。

今振り返って思うのは、道場での実践行は禅僧の基本であり不可欠ですが、教義を学ぶことも同様に大切だということです。少なくとも私の場合はもし高等布教に参加していなかったら、未だ悶々と

した日々を過ごしていたかも知れません。仏教を学んだことで、これまでやって来たことの意味や目指すべき人生の方向に気づくことが出来ました。禅宗には「黙って坐れ、坐れば判る」という考え方もありますが、修行年数が短期化している昨今、修行の目的や僧侶として生きていく意義について学ぶことはとても重要だと思います。

――
『中外日報』の読者は主として僧侶や神主などの宗教家ですので、全四回のうち前半二回は自己紹介がてら自分のこれまで経験を振り返って感じたことを書いてみました。後半二回は今後の事について思う所を述べています。